

名詞と形容詞の装定用法

- 色彩と距離の表現における選択条件 -

木下りか
大手前大学

kishita@otemae.ac.jp

1. はじめに

色彩と距離は、語基を同じくし意味的に対応関係にある名詞と形容詞で表すことができる。装定用法においても、たとえば次のような対応関係が見られる。

(1)色彩：赤のカバン/赤いカバン 白のカバン/白いカバン 黒のカバン/黒いカバン
(紫のカバン/*紫いカバン)

距離：遠くの学校/遠い学校 近くの学校/近い学校 地中深くの地層/深い地層
(??地中浅くの地層/浅い地層)

色彩用語(色彩名詞と色彩形容詞)と距離用語(距離名詞と距離形容詞)とでは、眼前の事態を描写する場合、名詞と形容詞のいずれが選択されるかが異なる。すなわち、色彩用語の場合：形容詞が描写機能を担う。沢田(1992)

(2)Q：何が見えますか？

A：テーブルの上に青い/(?青の)コップが見えます。(沢田(1992)例文(18))

(3)ほら、見て。あそこに白い/(?白の)ばらがたくさん咲いている。(沢田(1992)例文(19))

距離用語の場合：名詞が描写機能を担う。

(4)痩せた畑でウシがスキを曳いている。遠くの/(*遠い)家から炊事の煙が上がる。

(5)林の間にも遠くの/(*遠い)家々が見えます。

そこで次のような問題が浮かび上がる。

- ・眼前の事態を描写する場合、色彩と距離とで、名詞と形容詞の選択が異なるのはなぜか。
- ・色彩と距離を表す名詞と形容詞の機能に共通性はあるのか。

2. 色彩用語における名詞と形容詞の選択

沢田(1992)を参考に、名詞と形容詞の選択を左右する3つの場合について、本発表なりに整理をする。

2.1 「非制限的な修辞用法」「限定」「描写」

「非制限的な修辞用法」

(6)東の空に赤い/(??赤の)太陽が昇ると、一日がはじまる。(沢田(1992)のの例文(3'))

(7)冬になるとこの辺りは白い/(??白の)雪で覆われ、何も見えなくなる。

(沢田(1992)の例文(5))

・指示物の限定はしない・恒常的属性の引き出し 形容詞が選択される。

「限定」

「被修飾語によって示されるモノに内在する属性のうちの一つを取りだし、下位の要素として仕立てること」(沢田 1992 : 5-6)

(8)その青の/(青い)コップをとってください。

(9)A : どんな花がほしいの? B : 赤い花がほしい。

(10)A : いろんなりボンがあるけど、どのリボンがほしいの?

B : 赤のリボンがほしい。 被修飾名詞をモノとして限定する場合には、名詞のほうが適格。

・指示物の限定・恒常的属性の引き出し 形容詞・名詞ともに容認される。

「描写」

「話し手が知覚したものをそのまま写しとったり、あるいは受けた印象を素直に描き出すこと」

「日本語の場合、装定の環境では限定との違いは明確にはならず、かろうじて描写型の文に埋めこまれている場合のみ、そのコンテキストに依存して「描写的働き」が認められると言えよう」

(沢田 1992:9)

(11)Q : 何が見えますか?

A : テーブルの上に青い/(?青の)コップが見えます。(沢田(1992)例文(18))

(12)ほら、見て。あそこに白い/(?白の)ばらがたくさん咲いている。(沢田(1992)例文(19))

・指示物の限定は意図しない・恒常的属性の引き出し 形容詞が選択される。

(13)熱で赤い/(*赤の)花子の顔は、いつになく弱々しく見えた。

・指示物の限定はしない・臨時的属性の引き出し 形容詞が選択される。

2.2 から に共通する名詞と形容詞の使用条件

色彩形容詞の装定用法

から のいずれの文脈でも使用可。(10)のように指示機能が前面化する場合には名詞のほうが適格であることから、「被修飾名詞の属性について述べる(属性の引き出し)」の機能を持つと考えられる。

色彩名詞の装定用法

の場合にのみ適格となることから、「被修飾名詞を指示物として限定する」機能を持つと考えられる。

3. 描写の文脈下における距離用語の選択

3.1 描写の文脈と視点の位置からの距離

「描写」とは、「話し手が知覚したものをそのまま写しとったり、あるいは受けた印象を素直に描き出すこと」(沢田 1992:9)である。つまりは、話し手の知覚・印象(見え方)について述べるのであるから、距離について述べるのであれば、「視点の位置からの距離(遠さ)」を表す場合がこれに相当する。

(14)林の間にも遠くの/(*遠い)家々が見えます。(例文(5)を再掲)

(15)雨のペールに包まれてきた遠くの/(*遠い)家々やビルも今やはっきり見える。

(16)見ると、日の光に遠くの/(*遠い)山々が光っている。

3.2 名詞と形容詞の選択

3.2.1 距離名詞の装定用法(「遠くの」)が適格となる理由

「遠い」が相対的形容詞として分類されることが示唆するとおり、距離判断には比較のプロセスが関与する。視点の位置からの距離について述べる(距離の「描写」)の場合、視界中のほかのモノとの比較がなされることになる。

相対的形容詞「相対的形容詞の指示対象としては、比較の対象となる個体や事態が与える、ある基準を超えるような程度の属性をもつ個体または事態の集合を考慮するのが妥当である。」(町田 1997: 258 下線は引用者)

絶対的形容詞「ほぼ名詞と同じ意味的性質をもっていて、状況を考慮に入れなくてもその指示対象が一意的に定まるものである」(町田 1997: 254 下線は引用者)

状況の中におけるほかのモノと比較して、その平均的距離を基準にそれ以上の距離のモノを「遠い」と判断する、ということは、指示物としての限定に他ならない。したがって、「被修飾名詞を指示物として限定する」機能を持つ名詞(「遠くの」)が適格となる。

いっぽう、色彩用語の場合には、絶対的判断がなされるのであるから、比較の対象とするための指示物の集合が必要とされるわけではなく、指示物としての限定を表す名詞ではなく、属性を表す形容詞が選択されることになる。

3.2.2 距離形容詞の装定用法(「遠い」)が容認されない理由

「視点の位置からの距離(遠さ)」「距離の「描写」)は、被修飾名詞の「属性」とは捉えにくい。比較判断の対象は、話し手によって主体的に把握されているものであり、その判断そのものも当然のことながら、話者の主体的関与の度合いが高いものとなる。したがって、モノに属する性質(属性)というモノと属性との結びつきよりは、話し手が付与する特徴であるという、話し手の関与という側面が強くなる。

「被修飾名詞の属性について述べる(属性の引き出しを表す)」という機能を持つ形容詞の装定用法は、この文脈では容認されない。

4. おわりに

1) 色彩と距離を表す名詞と形容詞の装定用法としての機能の共通性

形容詞：被修飾名詞の属性について述べる（属性の引き出し）。

名詞：被修飾名詞を指示物として限定する。

2) 眼前の事態を描写する場合、色彩と距離とで、名詞と形容詞のいずれが選択されるかが異なるのは、

色彩用語：絶対的判断 属性について述べる形容詞が用いられる。

距離用語：相対的判断 視点の位置からの見える他のモノとの比較において距離判断 指示物として限定する名詞が選ばれる。

また、話者による属性の付与という側面が強いため、「属性の引き出し」を表す形容詞は不適格となる。

参考文献

河上誓作(1984)「文の意味に関する基礎的研究 - 認識と表現の関連性をめぐって - 」『大阪大学文学部紀要』24 pp.67-76

木下りか(2005)「形容詞の装定用法をめぐる一考察 - 「遠い」「多い」の場合 - 」『大手前大学人文科学部論集』5 pp.25-35

沢田奈保子(1992)「名詞の指定性と形容詞の限定性、描写性について - 色彩名詞と色彩形容詞の使い分け要因の分析から - 」『言語研究』102 pp.1-16

寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版

寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版

仁田義雄(1980)『語彙論的統語論』明治書院

長谷川重和(1990)「形容詞の装定用法と述定用法について」国語学会平成2年秋季大会要旨

町田健(1997)「形容詞の意味について」『北大文学部紀要』45-3 pp.247-272